

『枯野抄』その後 ―芭蕉終焉の旅路―

After “Karenô Sho” –Basho’s Last Journey–

木佐貫 洋

KISANUKI Hiroshi

Abstract: Some of the works written by his disciples show what Basho was like in his final years. There are also quite a few studies on his later works, especially on his farewell:

*tabi ni yande,
yume wa karenô wo,
kake meguru.*

This paper focuses on how his body was transported after he died. According to his will, his body was carried to Gichuji Temple in Zeze directly after his death and arrived at the temple before noon the next day. If you go in a straight line, it’s 60km from Hanaya inn where he passed away, to Gichuji Temple. Hanaya inn is located in Kyutarou-Cho Midou Mae, Osaka. It’s also known that his body was transported by Nijikkoku-Bune, this is a type of old Japanese freight boat. They traveled from Hakken-ya to Fushimi through The Yodo River. However, it’s not certain what was used to transport his body and which route was taken from the inn to Hakken-ya, and from Fushimi to the temple. In fact, there aren’t any studies that have made it clear about these mysteries. This paper discusses Basho’s last journey considering every possible route.

Keywords: Nijikkoku-Bune, Hakken-ya, Fushimi, Gichuji Temple, Zeze, Basho’s last journey

キーワード: 二十石船、八軒家、伏見、義仲寺、膳所、芭蕉終焉の旅路

I はじめに ―『枯野抄』以前、芭蕉・生前最後の旅―

各務支考¹の『芭蕉翁追善之日記』²は、芭蕉の晩年前後に付き従い、後に日記の形態で書いたものである。通常の日記形式ではなく思い出しながら書かれたものであるが、支考自身の実体験を記したものである。それ故、具体的で詳細な芭蕉晩年の記録となっている。

芭蕉は大阪で俳諧師として反目していた二人の弟子、之道³と洒堂⁴の和解の仲を取り持つ為に来阪する。元禄7年(1694年)9月8日、故郷伊賀上野の実兄半左衛門宅を早朝に出発する。



伊賀上野市の俳聖殿の芭蕉像



伊賀上野市にある芭蕉の生家

伴は支考、素牛（惟然）⁵、又右衛門⁶、二郎兵衛⁷であった。笠置からは木津川を舟で下り、「かも」（加茂）で舟をおりた。それから平城山^{なら}を超えて奈良を目指した。奈良では猿沢池の近くで投宿した。その折りに詠んだのが次の句である。

ぴいと啼く尻声悲し夜の鹿

（笈日記⁸）

発情期の雄鹿の声を聴いたのであろう。翌日の9月9日、奈良を出発し、おそらく矢田丘陵の榎木峠^{むろのき}を駕籠で、さらに暗峠^{くらがり}⁹（標高 455m）は馬に乗って越えたと思われる。（今年の9月22日、筆者も奈良側から暗峠を自転車で走破した。結構登坂斜度のきつい峠である。とくに、大阪側の平均斜度は17.0%、最大斜度は28.1%〈in側37.0%〉である。狭い峠道であるが国道308号線である。『酷道』という別名を持っている。病身の芭蕉が歩いて暗峠を越えて行ったとは思えない。）そして、芭蕉一向は生玉（現：天王寺区生玉町）を通り、夜には洒堂宅に入った。この日に芭蕉が詠んだ句の代表作は次の句である。また重陽の節句日なので、

菊の香やな良には古き仏達

（笈日記）

菊の香にくらがりのぼる節句かな



暗峠中腹から奈良方面を望む



暗峠：大阪側最大斜度部分（in側37%）

という句を詠んだ。大阪での芭蕉は体長不良が続くが、之道と洒堂の和解の仲介をはじめ、在

阪の門人等と連句の会にも参加した。しかし、10月5日には病状が悪くなり、終の場所となった南御堂前の花屋の貸座敷に移った。それから1週間後の10月12日の午後には息を引き取ろうとしていた。ここまでが芥川の『枯野抄』以前である。『枯野抄』は臨終を迎えようとしている芭蕉近くに侍っている弟子達の、数時間の心理と行動を描いた短編小説である。

さて、芭蕉は大阪にはあまり良い印象を持っていなかった。以前の旅(「笈の小文」¹⁰の旅(貞享4年・1687年～元禄元年1688年)でも、大阪に興味を示す句や文はほとんど残していない。(箕面と高槻での句はあるが、ここでは大阪と別と考える)敢えて言えば、

杜若語るも旅のひとつ哉

元禄元年(1688年)

の句があるぐらいである。この句にしても、伊賀上野出身の保川一笑(紙屋保川弥右衛門のこと)を訪ねた折の挨拶句である。大坂(難波)の印象ではなく、前詞に「大坂にてある人のもとにて」とあるように、『伊勢物語』の業平の旅の心に重ねて詠んだものである。大坂に好印象を持って詠んだ句でもない。天満(天満八軒屋)で宿泊したときの印象が特に悪かったようである。(伊賀の卓袋への手紙で分かる)しかし、晩年一ヶ月余りを過ごした大阪で詠んだ句は優れたものも多く、人口に膾炙したものも多い。

升かふて分別かはる月見哉	9月26日	(芭蕉書簡)
人声や此道かへる秋の暮れ	9月26日	^{うかむせ} 浮瀬 ¹¹ にて
此道や行人なしに秋の暮れ	9月26日	浮瀬にて
此秋は何で年よる雲に鳥	9月26日	浮瀬にて
白菊の目に立てゝ見る塵もなし	9月27日	園女亭での歌仙発句
秋深き隣は何をする人ぞ	9月28日	
そして		
旅に病で夢は枯野をかけ廻る	10月8日	
最後の一句となった		
清滝や波に散り込む青松葉	10月9日	

これらの句の多くは折に触れて耳にすることも多い。最後の10月9日の「清滝や」の句は一般的にはあまり知られていないが、詳しい意味ではこの句が最後の一句と言える。「この句は、芭蕉が改案と言っているが、元の句とは内容が全くの別のものになっている。これまでとは異なる、死を前にした境で詠まれた新作である」¹²⁻¹と魚住孝至は論じている。また、「青松葉」という語については、

波に散り込む「青松葉」とは現実の葉ではなく、芭蕉自身なのである。「青松葉」という

語には、松尾芭蕉の名の音が全て入っている。「青松」は下から訓読みすれば「まつお」、
「松葉」を下から音読みすれば「ばしょう」となる。さらには桃青の青も入っている。
かつて「発句也松尾桃青宿の春」（延宝七年歳旦吟）、「幾霜に心ばせをの松かざり」（貞享
三年歳旦帳）と自らの名を詠み込んだこともあった。人生の最後に自分の名を巧みに詠み
込んでいるのではないか。¹²⁻²

と述べ、「清滝や」の句が最後の一句であると論じている。確かに魚住の述べる通り「清滝や」
が最後に関わった句であると言える。しかし、芭蕉の人生の最後の感慨としての句は

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

の句であり、その意味では辞世の句として差し支えないと思う。しかし、「いにしへより辞世を
残す事は、誰ゝもある事なれば、翁にも残し給ふべけれど、平生則ち辞世なり、何事ぞ此節
にあらんやとて、臨終の折一句なし」¹³と路通の『芭蕉翁行状記』にあるのを見れば、あくま
でも「病中吟」と考えねばならない。ともかく芥川がこの句を『枯野抄』のエピグラフに引用
し、かつ作品全体のモチーフとしたことで作品として成功している。

一方、芭蕉の生前最後の言葉は9月12日の昼に発した言葉である。それはやはり、支考の『芭
蕉翁追善之日記』に記載されている。

其日は小春の空の立帰て暖なれば、障子の蠅の集り居けるをにくみて、とりもちを竹
ぬりて狩りありくに、上手と下手のあるをおかしがりて、「此蠅のおもはぬ病人をやどし
てよこぶらめ」とゑみて申されければ介抱の者も嬉しくて、こゝろとけぬ。其後は何
事もいはずなりて、臨終申されしに、誰も〽 茫然として、終の別れとは今だにおも
はぬなり。

昼頃、はっとして目が覚めた芭蕉が、弟子の蠅の取り方を可笑しく思つて述べたと記録され
ている。「上手と下手のあるをおかしがりて」、「此蠅のおもはぬ病人をやどしてよこぶらめ」
と弟子の蠅の取り方の評価であった。辞世の句は人生の感慨が凝縮されたものであるが、最後
の言葉が「蠅」についての事なのだから、まさに俳諧師の面目躍如たる言葉ではないか。あく
まで「俳」の意味は滑稽である。芭蕉は期せずして「俳諧」の神髓の言葉をはなつて死んだの
だ。

さて、晩年の大阪での句の評価が高いのは、芭蕉自身が実感的に死期を悟らざるを得なかつ
た時に詠んだ句であることは否めないからだ。花屋に移った頃から、芭蕉の容易ならざる状態
を知った弟子達が芭蕉の枕頭に集まった。彼らは夜伽（看護）や今生の別れをする為にだけに
集まったのではあるまい。芭蕉から最後の教えを何らかの形で聴きたいと思ったのであろう。
その微妙な弟子達の心の綾を描いたのが芥川の『枯野抄』である。

Ⅱ 芥川龍之介の『枯野抄』について

芥川龍之介の『枯野抄』は、芭蕉の臨終時の弟子達の心理を描写した作品である。奥野久美子は『枯野抄』の作品論を芭蕉の弟子である丈草¹⁴の位置づけを通して展開している。

つまり、丈草以外の弟子たちの心理には芭蕉の性格や個性など、いわば芭蕉という人間の中身が影響していないのである。(中略)

しかし丈草の場合は「芭蕉の人格的压力」とある。師匠であることによる圧力ではなく「人格的压力」というからには、丈草の「解放の喜び」は、人間一般でも師匠一般でもなく、その『人格』を伴った芭蕉の死によってしか得られないものなのである。丈草の心理が他の弟子たちと区別できるのはこの点である。¹⁵

と奥野は述べている。これは個人の資質がいかに影響力を持つかと言う問題提起でもある。また、奥野は、「丈草の感慨が他の弟子のものとは差異化されており、芭蕉の死と丈草の生という形で、作品の根幹をなす枯野の句の解釈（〈夜明け〉の対照としての〈暮色〉）が成り立っているという構造である」¹⁶とし、「つまり丈草に込められたモチーフは一人の人間の死によって他の人間が生を得るという、月並みではあるかもしれないが冷厳な心理であろう」¹⁷とも述べている。そして奥野は次のように纏めている。

丈草の本来の生は単なる人間一般や師匠一般としての外面的な芭蕉の死ではなく、芭蕉の「人格的压力」の死によってのみもたらせるものであり、その生と死の対比が、枯野の句の解釈として作品の基底をなしている。丈草の重要性はそこにある。¹⁸

このように「人格的压力」と「丈草の生」という二つのテーマで『枯野抄』を捉えるならば、芥川の『枯野抄』に描かれている弟子達のそれぞれの思いは肯定的に考えることが出来る。そして、その後の芭蕉葬送から葬儀に至る弟子達の様子は、これまた肯定的に捉えることが出来る。それは芭蕉と弟子がそれぞれ如何に関わってきたかということでもある。

芭蕉は「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の推敲したことを、「妄執」と考えた¹⁹。俳道を極めようとする欲望に最後まで囚われている。その欲望深き自己を自嘲気味に分析している。俳句の道の奥深く入っても、入っても、その向こうに極めきれないものがある。しかし、足を踏み入れざるを得ない。そういうとてつもない欲望を「妄執」と捉えているのである。丈草を通して表現した「人格的压力」は、そのような芭蕉のパトスとも言える「妄執」から感じられるものではないか。芭蕉はその「妄執」から死という形で解放される。丈草だけでなく他の芭蕉の弟子達も、芭蕉の死によって「妄執」と「人格的抑圧」から解放されたのではあるまいか。

丈草をして語らしめている『枯野抄』の結末部分は芸術性を追い求めている芥川の感慨でもある。そもそも、個人の末期の様子が詳しく文献的に多く残されているのは珍しい。しかも前述しているように、遺体が直線的に約60kmも離れたところへ秘密裏のように運ばれること自体、当時としては希なことであった。異例で困難な遺体の葬送を極めて段取り良く、故人の遺志に従って迅速に行われた事を見ると、弟子達の実力（社会生活上）を推し量ることができる。之道は献身的な芭蕉の看病で、芭蕉の重鎮たちに認められ、対立的な立場にあった²⁰ 洒堂を結果的に押しのけ、蕉門の大坂代表となった。蕉門の代表格の其角²¹は、芭蕉のひと七日の追善供養句会を主宰し、江戸派の代表となる。支考は美濃派の代表となり基角と対抗した。その後の蕉門はまさに芭蕉の「人格的抑圧」から解放され、実力あるものはそれぞれ蕉門の代表格を自認しながら生きる糧を追い求めた。近代になって、このことを俳句の墮落として指摘したのが、正岡子規であった。子規は芭蕉と蕪村を対比した²²。とくに「古池やかかはづ飛び込む水の音」などの人口に膾炙された句を痛烈に批判しつつ、近代俳句の筋道を構築してきた。しかし、子規は芭蕉が生涯詠んだ約1000句の五分之一、すなわち200句程は優れた句として評価している。子規は芭蕉を実は認めているのである。ただ「人格的圧力」から解放されたはずの、蕉門の人々のその後が問題と子規は考えたのである。芭蕉を俳聖などと持ち上げ神格化して、自己の欲望の為に芭蕉を利用してきたことを痛烈に批判してきたのである。そして子規は芭蕉を次のように観察していた。

- 1 大食にして胃弱であった
- 2 多情の人にして肉体の欲を他に伸ばす能はざる者
- 3 芭蕉妻を娶とらず。其他婦女子に關せる一切世に伝はらず。芭蕉戒行を怠らざりしか史伝之を逸したるか姑らく記して疑を存す。²³

これは、俗人としての芭蕉観でもある。芭蕉を神から一般市民に引き戻したと言えよう。だからこそ、俳句は今日まで多くの人に親しまれるものに発展してきたとも言える。芥川の『枯野抄』は子規のそう言う思いを引き継いだものにもなっている。また、芥川は師である漱石の臨終の場面を想像し、この『枯野抄』を執筆したと言われている。



芭蕉終焉地： 南御堂前の御堂筋分離帯の中にある



「高瀬舟」：京都・高瀬川

Ⅲ 『枯野抄』 その後の芭蕉葬送ルートと移動手段

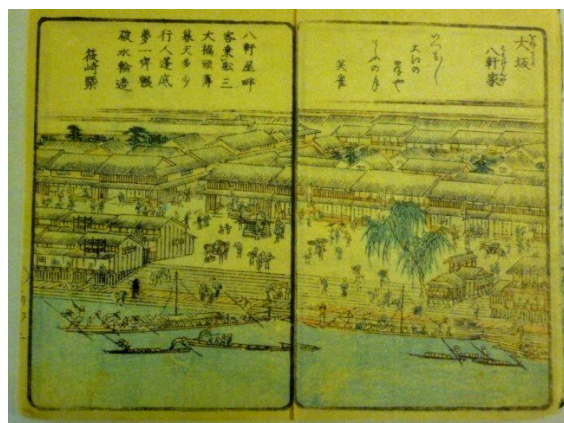
芭蕉は天津の乙州（おとくに）²⁴ という門人に、遺骸は膳所の義仲寺の木曾塚のところに葬ってほしいと遺言していた。このことは路通²⁵の『芭蕉翁行状記』の、

翁も今はかゝる時ならんと、あとの事をも書置、日比とゞこほりある事共、むねはるゝばかり物がたりし、偕からは木曾塚に送るべし。爰は東西のちまた、さゞ波きよき渚なれば、生前の契深かりし所也。懐しき友達のたづねよらんも、便わづらはしからじ。乙州敬して、約束はたがはじなどうけ負ける。²⁶

と記されていたことで分かる。元禄 7 年（1694 年）10 月 12 日午後 4 時頃息を引き取る。弟子たちは迅速に芭蕉の遺言を実行した。当時としては誠に希有な遺体の搬送行動であった。

〔1〕 終焉地「花屋」から八軒家浜(大坂)まで移動手段は高瀬舟

「淀川兩岸一覽：毛馬部分」 淀川堤毛馬の蕪村頭彰碑の説明石板。三十石船を堤防上から船頭達が綱で曳いていることがよく分かる。



〈図 1〉 「淀川兩岸一覽：大坂八軒家浜」

三十石船が接岸しているのが描かれている

（大阪府立中之島図書館蔵：掲載許可済み）

芭蕉の遺体は終焉地である南御堂前の花屋（御堂に花を納める店）近くから高瀬舟に乘せられ、「八軒家浜」（図 1）まで行き、二十石船か三十石船²⁷の過書船に乗り換えたと思われる。当時、過書船の三十石船は客船専用で、二十石船は荷物専用（チャーターが容易）であった。遺体を長櫃に入れ、商人の荷物のようにして運んだと其角が述べている（『芭蕉翁終焉記』後述する）のを考慮すれば、二十石船である可能性が高い。

また、花屋から八軒家浜まで大八車（大坂^{せんしゃ}軽車）での陸上輸送かとも思ったが、路通の『芭蕉翁行状記』には「やがてとりしたため、むなしきからを高瀬に乗、廣からぬ船の中、つきさうものはおほけれど」とあり、之道の『こがらし』には「浪華に下向を願ひ、あへなく十月中

の二日にをくれ侍りぬ。悲しきなきがらを同門に渡して舟を見送り、人知れず棺にむかひて永きはなむけを捧ぐ」²⁸とある。これら両者の文章から「高瀬舟」²⁹で移動したと言えるだろう。「高瀬舟」の構造は過書船の構造と明らかに違う。過書船の構造は小嶋良一が「近世期における日本の船の地域的特性」という論文で次のように述べている。

一方、淀川は大阪と京都を結ぶ重要な幹線水路となっていた。ここを航行した代表的な過書船であるが、船の種類としては天道船と呼ばれる船型で（図を示しているがここでは示さない⇒筆者）、二階造り、二枚の板で構成される三押（みよし）等が特徴である。三十石船、淀上荷船などと呼ばれる船も同様の形式と考えられている³⁰

一方、高瀬舟の特徴は平底で二階造りではない。明らかに違う船体・船型をしている。この事と、路通が「むなしきからを高瀬に乗」と述べていることの両方を合わせて考えると、前述の八軒家浜で二十石船（三十石船）に乗り換えた説をさらに補強できる。ではどの辺りから高瀬舟に芭蕉の遺体を載せたのか。当時の過書船等の船着き場の代表的なものとして、八軒家浜以外に道頓堀、東横堀、淀屋橋と4カ所あった。南御堂前の花屋からは距離的には東横堀川（0.9 km程）の農人橋付近が一番近い。ここからであれば東横堀川を北1.2 km程上がれば大川に入り、さらに大川を0.6 km程上流に上がれば八軒家浜に着く。

しかし、距離的にいえば、当時の花屋からは西横堀川までは300m程、長堀川まで700m程で近い方をとるならば、東横堀川説は消える。ただ、小型の高瀬舟であれば正式の船着き場でなくてもいい訳だから、西横堀川、長堀川のどこからでも乗船することができる。いずれにしても文献上出てこないのが、現在のところは推察するしかない。高瀬舟を利用したとすればそのように考えるのが妥当である。

ところで、花屋から高瀬舟に芭蕉の遺体を入れた長櫃を載せる場所までは、陸上の移動手段がいる。それは多分（図4・5⇒注45）にある「大坂せんしや軽車」（または大八車）であろう。花屋の主人、仁右衛門は芭蕉の追善集にも句を載せている人である。商人でもあるので様々な気配りが出来たであろう。「大坂せんしや軽車」や高瀬舟の手配、二十石船（三十石船）の手配等、彼が段取りしたのではないだろうか。また車庸という弟子も大坂の相当裕福な商人だ。そして芭蕉を大坂に招請した弟子の之道は、大坂の葉問屋の主人なので彼が手配をしたかもしれない。

【2】 八軒家浜(大坂) から伏見までの移動手段は二十石船（三十石船）

よぶね こんぱくとほ かれすはら
夜舟にて魂 魄 通る 枯洲原

誓子

芭蕉の骸を載せた二十石船は、元禄7年（1694年）10月12日の夜8時～10時頃、守口辺りの淀川を弟子達に見守られながら静かに遡行していった。拙宅は大阪市の旭区にあるが、守口市に近接している。芭蕉の骸は我が家の数百メートルの範囲の所を通過したのは間違いない。

前掲句は山口誓子³¹（1901－1994）がその折のことを偲んで詠んだものである。芥川龍之介の『枯野抄』に描かれている以降の場面を想像して詠んだ句である。この誓子の句は昭和 37 年 5 月 3 日に句碑として、守口市橋波東之町 2 丁目にある南画家の重鎮、直原玉青翁³²（故人）宅に建立されている。直原玉青はこのイメージを「芭蕉の夢」というテーマで大作を描いている。現在、大阪南御堂の難波別院に展示されている。玉青は後年次のように述べている

芭蕉が守口市に来て、その足跡があれば意味は大きいのだが、足跡はない。そこで私は、芭蕉死後の歴史を考えた。その頃の守口市は淀川に臨んで東海道五十七宿の一つであった。芭蕉は元禄七年十月十二日旅中大坂南の御堂前花屋の一室で

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

の一句を残して死界した。その夜、弟子達に護られて大阪天満から夜舟で淀川を上り大津の義仲寺に葬られたのであるが明治初年、守口市の側の淀川の本流は北の方で屈曲し³³氾濫が多かったので、新淀川として直流させ、その川敷は一号線として守口市の中心をなしている。芭蕉は死後舟で今の守口市の中心を通過したことになる。私は俳人山口誓子氏に依頼して、

夜舟にて魂魄通る枯洲原

の句を得て、その句碑を芭蕉堂³⁴の側に建てた。³⁵



「芭蕉の夢」直原玉青：筆
『南御堂と芭蕉』より転載
(大阪：難波別院蔵：掲載許可済み)



「東横堀川」 農人橋 芭蕉の遺体がこの辺りから 高瀬舟に乗せられた可能性がある。花屋から約 900m。

また、山口誓子はこの句について次のように語っている。

大阪府守口に住む直原画伯に、芭蕉の遺骸が淀川を遡ったときの句を所望されて、この句を詠んだ。芭蕉の遺骸は八軒屋から夜舟に積まれて淀川を遡った。昔の守口は洲をなしてみたさうだから。その枯れた洲原を思ひ描いて、芭蕉の舟を通らしめた。芭蕉は魂となつて、そこを通つたのだ³⁶。

直原玉青、山口誓子は淀川を遡行する芭蕉の遺体を運ぶ様子から、芭蕉の人生観である「漂泊の思い」想像している。「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の句に芭蕉の人生を見たのだ。その状態はまさに枯野の状況にあった淀川のイメージと重なり合つたのであろう。玉青の絵と誓子の「夜舟にて魂魄通る枯洲原」の句とは、芭蕉の最後の感慨をよく表している。南画と俳句のコラボレーションであった。一方、魚住孝至は芭蕉の最期の一句の「枯野」について次のように述べている。

では、なぜ「枯野」であつたのか。今、芭蕉が伏せている地が難波（大坂）であり、宿は花屋である。十月に入って季節は冬。難波で冬といえば、西行の有名な歌が思い起こされたに相違ない。

津の国の難波の春は夢なれや蘆のかれ葉に風わたるなり 西行
(新古今六二五)

この西行の歌は、能因法師の歌を踏まえて詠まれている。

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしき 能因
(後拾遺四三)

(中略)

表面的には繁榮するに見えて、風雅の道では、能因が「見せばや」と詠った春は夢のごとくであり、西行の歌のままに荒涼たる枯野に風が吹きすさんでいるのではないのか。³⁷

芭蕉の「枯野」の出所は、能因と西行の求めたところではないかと、魚住は論じている。その「枯野」の場所としてふさわしいのは「難波」で、季節は「冬」と考えている。芭蕉の想像した枯野は、冬の淀川の枯れ洲原こそふさわしいシチュエーションと考えられる。

ところで、日本最古（最初）の船の名前は^{からの}「枯野」である。仁徳天皇の御代である。『古事記』にその記述が出てくる。『古事記』では^{からの}「枯野」は速い船であると記述されているが、河川を走ったとは書いていない。しかし、^{からの}「枯野」が葦枯れた河原が広がる川を遡っていくのを想像すれば、「夢は枯野をかけ廻る」のイメージとまた重なり合ってくる。

芭蕉が『古事記』の「^{からの}枯野」を意識していた証拠は見当たらない。しかし、『古事記』の「^{からの}枯野」を意識していれば、さらに漂泊の思いが深化させられるように思う。「^{からの}枯野」が二十石船に置き換えられたと考えれば、芭蕉が自分の葬送のシナリオを「^{からの}枯野」の句で表現したと言える。

『古事記』の「^{からの}枯野」は古くなり塩を焼く薪になるとある。焼け残った木で琴を作ったところ、その音は遠くまで聞こえたという。芭蕉の名声が死んだ後も遠く永く聞こえたことと重なり合う。また、「月日は百代の过客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす」と『奥の細道』冒頭文にある通り実践したのだ。死後までも「舟の上」にて旅に出かけたのである。こう考えると、芭蕉の遺体が夜舟で枯野原の淀川を葬送されたことは偶然でないようにも思える。芭蕉の骸と魂を載せた夜舟が枯野原の淀川を遡行するイメージは、まさに誓子の句のイメージにも重なる。

とにかくにも、芭蕉は元禄 7 年（1694 年）10 月 12 日³⁸の午後 4 時頃、南御堂前の久太郎町 6 丁目の花屋の裏座敷で亡くなった。享年 51 歳であった。芭蕉の遺体は三十石船の夜舟（京都の伏見と大阪の八軒家を結ぶ定期客船）で搬送したのではなく、荷物ように偽装して運ぶ訳だから、夜舟の荷物専用の二十石船のチャーター船に乗せなければならなかったようだ。



現在の「八軒家浜跡」・京阪電車「天満橋駅」付近



秋の淀川夕景・左岸の守口側堤から六甲山を望む

芭蕉の遺体は白い長櫃に納められて舟に乗せられる様子を、其角が『芭蕉翁終焉記』で次のように語っている。

十二日の申の刻ばかりに、死顔うるはしく睡れるを期として、物打ちかけ、夜ひそかに長櫃に入れて、あき人の用意のやうにこしらへ、川舟にかきのせ、去来・乙州・丈草・支考・惟然・正秀・木節・吞舟・寿貞が子次郎兵衛・予とともに十人、「苦もる雫、袖寒き旅ねこそあれ」と、ためしなき奇縁をつぶやき、座禅・称名ひとりびとりに、年ごろ日比のたのもしき詞、むつまじき教へをかたみにして、誹諧の光をうしなひつるに、思ひしのべる人の名のみ慕へる昔語りを今さらにしつ。³⁹

「夜ひそかに長櫃に入れて、あき人の用意のやうにこしらへ、川舟にかきのせ」という其角の文章から、芭蕉の遺体を運ぶ事の困難さが窺える。当時の淀川の舟運は隆盛を極めていたが、それだけに厳しい制限があった。上野洋三は次のように述べている。

つまり遺体を動かすことに、なにか制限が、もちろんあったのだろうと思います。死んだ人の死骸を持って歩くわけであるから。そこで、長櫃に入れて「あき人の用意のやうにこしらへ」と、やはり『終焉記』には書いてありますが、商人の荷物ようにして、それで河舟に乗せた。そして、淀川をずっとさかのぼって、翌日伏見に着いて、そこからは陸行して、大津に着き木曾塚の無名庵に葬られることになったわけであります。

以上が、芭蕉が大阪に到着してから死骸が運びだされるまでであります。この死に方は、たいへん変わっております。一つは、あとの方から申しますと、遺骸が移されたということ。この頃とすれば、かなりの空間を移動して、埋葬された。その間の事情が、しかも、たいそう詳しく記録されている。そういう経過をとった、ということは、当時のふつうの人、市井の一人の俳諧師としては、めったにない珍しい事であったということ⁴⁰

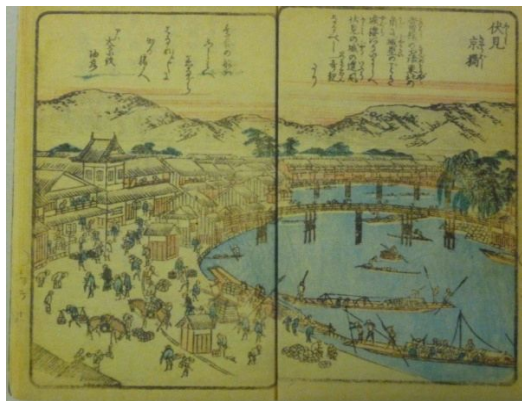
淀川には船番所⁴¹がいくつもあり、航行する船は手形も受けなければならなかった⁴²。荷物の検閲も船番所は行っており、遺体を運ぶことには困難が伴った。「あき人の用意のやうにこしらへ」とあるのは、商人の荷物のようにして“運ぶ”というカモフラージュが必要であったのである。

山口誓子はこの時の二十石舟の様子を偲んで、「夜舟にて魂魄通る枯洲原」と詠んだのである。そしてこの時のことを「大阪と芭蕉」というタイトルで『天狼』⁴³の昭和39年1月号に記事を載せている。

〔3〕 伏見から義仲寺への足取り

芭蕉の遺体を、伏見の京橋からどの道を通って、また、どのような運搬手段を使って膳所の義仲寺⁴⁴まで運んだのか。10人が付き添っていても、伏見から義仲寺まで（約20km）重い長櫃を運ぶには相当の無理がある。樋口寛の『淀川下り日本百景』⁴⁵には「車」を使用したとある。おそらく「大八車」であろう。大津街道の京都側起点は(図3)の「淀川兩岸一覽：藤杜岐道」の所である。この絵では大八車で米を運ぶ人が描かれている。

江戸幕府は大八車⁴⁶など比較的大量に陸上輸送出来る車輪類を、戦略上厳しく取り締まっていた。但し、江戸、京、伏見、大阪等の大都市では許可されていた。芭蕉の弟子、乙州は大津の運送業の元締めである。大八車の手配などは造作もないことであつたろう。



〈図2〉「淀川兩岸一覽：伏見京橋浜」

大阪府立中之島図書館蔵：掲載許可済み



大津街道（大岩街道）（名神高速道路にも沿っている）

「考えられる街道ルート」

- ① 大津街道
- ② 伏見街道
- ③ 宇治の六地蔵を通り奈良街道へ抜ける道
- ④ 墨染通りから八科峠を通り六地蔵にぬけて、奈良街道に入る道
- ⑤ 三条を通る東海道の道



〈図3〉「淀川兩岸一覽：藤杜岐道」大八車が描かれて

いる。（大阪府立中之島図書館蔵：掲載許可済み）

道筋を辿ったのであろうか。さまざまな文献や研究論文やネットで調べたが分からなかった。また義仲寺に赴き尋ねたが、「まだ、研究した人がいないので分からない」という返事であった。また、芭蕉に関する様々な新旧の論文、資料を読んでも「早朝伏見に着いて、11時前後（巳の時過ぎと「花屋日記」⁴⁷にある）に義仲寺に到着した」程度の簡単なものであった。

大阪から伏見京橋浜への二十石船中の様子は、其角、支考、路通、等の文章から見られるが、

伏見の京橋浜（図2）に上がり大津・膳所に向かう江戸期の旅人が取る街道は、上記の五街道しか考えられない。②の伏見街道は五条橋口から伏見に至る道で現在、本町通りと呼ばれている道である。この道は一部使用したと考えられる。⑤の東海道の街道は、当時は大名でも遠慮をした道である。また、遠回りであるので考えられない。

問題は①、③、④の道である。どの道を選んでも地図上あまり変わらない。さて、どの

伏見から膳所への道程が欠落しているのである。ただし、路通の『芭蕉翁行状記』には「さてひつぎは逢坂の関を越し」（岩波文庫『花屋日記』100頁 1948年版）とある。どの街道を選ぶとも「逢坂の関」は通過せねばならないから、この点については議論の余地はない。さて、長櫃に入れた芭蕉の遺体の重さも相当なものであり、約五里（20km）の道のりは決して楽なものではない。したがって、安全で最短距離で楽な道をとりたいのが人情である。10人の同行者の中の一人乙州（おつくに）だけが、先に膳所に向かい準備をすることになった。

文暁の『花屋日記』を何度も読み直しているうちに「ハッ」とする地名に出会ったのである。「狼だに」⁴⁸という地名である。どこかで聞いた地名と考えていると、学生時代、京阪電車「墨染駅」近くに半年ほど居たこともあって、近くに「大亀谷」というのがあった事を思い出した。「これはひょっとしたら」と思い大津街道について調べるとやはりそうであった。「大亀谷」は「狼だに」のことであった。『花屋日記』では「狼だに」を通ったと記載されている。『花屋日記』が上梓されたのは文化七年（1810年）八月五日（ここでは序に記載されている日を上梓日とする）である。『京都の地名検証 風土・歴史・文化をよむ』の91頁～92頁には

これらの資料から考えると、十七世紀の書物では「狼谷」の地名が有力で、「大亀谷」は誤りであるとするが、十八世紀になると、「狼谷」の地名が消えてしまい、「大亀谷」が一般になって、その由来も茶店の女の名や徳川家康の側室の名によるとしている。

とあるように、「大亀谷」と称するようになったのは十八世紀とある。『花屋日記』は十九世紀の初頭に上梓されており、芭蕉が亡くなってから百年が経過している。文暁はどの文献からこの「狼だに（狼谷）」の地名を拾い出したか分らない。また、『花屋日記』は偽書と言われているが、執筆にあたって、其角の『芭蕉翁終焉記』、各務支考の『前後日記』・『芭蕉翁追善之記』、路通の『芭蕉翁行状記』を取り入れ創作しているので、資料的にも信用しても良い部分も多い。「狼だに」という記述はこれらの書物には掲載されていない。しかし、『花屋日記』では「大亀谷」ではなく「狼だに（狼谷）」と記述している。芭蕉の遺体が葬送された当時（十七世紀末）の地名の呼称と一致している。したがって、「狼だに（狼谷）」を芭蕉の遺体を通ったことは信用しても良く、文暁の単なる創作ではなく根拠のあることと考えられる。

さて、ここでまた困った問題が出てきた。大亀谷は深草谷口町に至るだけではないのである。八科峠に至る丘陵一帯を大亀谷と言うのである。八科峠を通り六地藏に入り、奈良街道を北上し追分で東海道に合流し大津、膳所に向かう道も比較的容易な道であるからである。また、源氏物語の薫大将と浮舟が通った「木幡越え」として古からの道でもあるからである。

三年前の春（2011年）、一昨年（2012年）の春、これらの道を4回に渡って現地調査した。芭蕉の遺体を通った道は、其角、支考、路通、等の文章、当時の交通事情、文献から見られる地名等を総合して、大津街道を使用したことがほぼ確定できた。だが、八科峠を超えるコースもわずかながら考えられる。しかし、実際、踏査してみると、八科峠を越える道は、墨染から

緩い坂道が続くのであるが、八科峠を六地藏側に下る坂は長い急勾配道であった。それに比べれば、大津街道は現在の大岩街道（名神高速道路が通っている道。最初の列車道でもある）を通っており、緩やかな坂が続く峠道である。実際に歩いて見ると、芭蕉の遺体を乗せた長櫃は大津街道を利用したに違いないと得心させられたのである。

道はできるだけ安全で、楽なところを選んで造られる。この当たり前のことを改めて知ることができた。逢坂の関も歩いて見て、（ここは地元の人以外、電車か車でしか通らない。）なるほど、関を作るには絶好のところと思った。大津街道は前述したように伏見までの道ではない。京都側の起点は現在の京都教育大学南門を西に下どり、伏見街道（本町通り）と合流するところである。角に銭湯がある。すぐ近くに京阪電車「墨染駅」がある。ここまで芭蕉の遺体はどのような経路を辿ったかは文献上見られない、伏見からは、まず、京町筋を通ることを土地の古老に聞いた。恐らく、芭蕉の遺体もこの道を通ったと思われる。それが自然な考え方である。この道は古く京都に出る主要な道でもあった。この道すがらには名所旧跡が多くある。明治維新の鳥羽伏見の戦いの跡、銀座の発祥地、大石内蔵助の遊興の地の撞木町遊郭跡、深草少将や小野小町塚、挙げればきりが無い。

『花屋日記』は僧文暁が芭蕉の弟子の様々な文献を集め創作した偽書であると、小宮豊隆は述べている。「狼だに（大亀谷）」の記述は文暁の『花屋日記』からしか現在のところ出てこないが、伏見から大津の膳所への道はこの道を通るのが一番合理的なのは確かである。

IV 終わりに

芭蕉には子規や漱石のような友人関係にある人がいたのであろうか。子規は虚子に後継者になってくれるように頼んだ。（いわゆる道灌山事件）芭蕉は後継者を求めたのであろうか。ないように思う。近代俳句の創始者が後継者を求め、近世封建社会に生き、発句（俳句）の革命を起こした者は後継者を求めなかった。芭蕉と子規の違いは興味をそそられる。

両者とも多くの弟子を持った。漱石もそうだった。彼らの弟子達の生き方の中に、それぞれの師の生き方の魂の断片があるのだろう。優れた弟子はその個性や能力を先鋭化し、それぞれの芸術精神を築いていった。一般にも言えることだが、一人の人間の評価する時は、他の人とのような関わり方をしたかを見ることが重要である。弟子や周りの人々とどのように生きてきたかという観点も大切にしながら評価することも大切である。

芭蕉の死の前日である十月十一日の晩に、夜伽の弟子達がそれぞれ心境を句に詠んだ。そして芭蕉にとっては弟子の句を批評する最後の機会となった。その折の事を去来が、次のように述べている。

其ふしぶしも等閑に見やり、たゞうづくまる寒さかなといへる一句のみぞ、丈艸出来

たりとは、感じ給ひける。実にかゝる折には、かゝる誠こそうごかめ、興を探り、作を求るいとまあらじとは、其時にこそ思ひ知侍りけれ。⁴⁹

芭蕉は夜伽で発句を詠んだ弟子⁵⁰の中で、

うづくまる藁の下の寒さかな

丈艸

という句だけを「丈艸出来たり」と褒めたのである。その状況を柴田宵曲は『蕉門の人々』の中で次のように述べている。

「吹井より鶴を招かん時雨かな」は其角、「しかられて次の間へ出る寒さかな」は支考、「病中のあまりすゝるや冬ごもり」は去来である。この時の作者はすべて八人、芭蕉としては生前に与える最後の批判、弟子たちとしては師に示す最後の発句であるだけに、平生とは気分の異なるものがあつたに相違ない。芭蕉の批評が他の一切に触れず、直に褒詞となつて丈艸の上に落ちたことは弟子としての最後の面目であるのみならず、また永遠に忘れ得ぬ思出でもあつたろう。丈艸のこの句には表面的に躍動するものはないけれども、再誦三誦するに及んで、真に奥底からにじみ出て来るような或者を感じずにはおられぬ。垂死の芭蕉はこれを感じ得て、佳しとしたものと思われる。⁵¹

小西甚一はこの丈艸の句を「悲痛な心情ではあるが、正直な把握の純粹さには『かるみ』がある。そこを認められたものらしい。」⁵²と評している。また、尾形侑 編『俳句の解釈と鑑賞辞典』には、この句の鑑賞として次のように述べられている。

芭蕉の病床には多くの門人が侍していたが、丈草のみ芭蕉に褒められた。作意なく真情が貫き、不安が募る気分を〈寒さ〉の一語によく要約し得ている。向井去来が感嘆したのも、芭蕉と同じくまず丈草の真情であつた。そしてさらに、一大事のときには、趣向を案じたり情景を描写したりの余裕はないといっている。そのとおりで、ここには構えた方法意識はなく、うづくまっている丈草の姿を彷彿とさせるほど、素直な詠みぶりである。⁵³

芭蕉の弟子に対する最後の句評は、「軽み」⁵⁴という俳精神（理念）の到達点でもあつた。末期にあつて弟子の句の中に、自身の俳諧精神を見出し得たのは、芭蕉にとって幸福であつたとも言える。芭蕉や漱石、子規の弟子達のそれぞれの生き方の何処かに、その精神が生かされている。崇高な哲学、芸術精神、そして俗なる人の部分も。

芭蕉の遺体がどのように運ばれたか。こういった問題は実につまらないように思うが、そうではなかった。芭蕉が芭蕉らしく死ねたのは実に多くの人々（弟子達）の献身的とも思える協力と援助のお陰である。葬送に関する煩わしい段取り、経済的負担は全て人任せにしているわ

けである。当時の庶民としては、破格の淀川廻りの葬送の旅を遂行するには、弟子達の行動力と経済力と知恵がなければ成り立たなかった。そのことをつくづく感じさせられた芭蕉終焉の旅路の考察であった。上田秋成が芭蕉の旅は「大名旅行」と批判したが⁵⁵、そのことを否定はできない側面はあるように思う。しかし、それらを引き出したのは芭蕉の魅力であり力でもあった。芭蕉の終焉の旅のあり方を考えることは、まことに、社会（当時のネットワーク等）、経済（お金等）、風俗、社会習慣（葬儀のあり方…武士階級の葬式は夜に、庶民は午前中が基本。芭蕉の葬儀は夜に行われた。）まで考証することであった。これらについても今後の研究課題が多く含まれている。とくに、「芭蕉とお金」を正面から研究した先行論文は今のところ見あたらない。当時は手紙を一本出すにしても、今日とは比較にならないほどの費用を要した。芭蕉はその点はどうしたのか。興味のあるところである。芭蕉の遺体が如何にして、どのような手段で運ばれたかを考察するにも、人間関係、お金、社会状況、民俗学や地理学、気象学的考察など、トータルの研究が必要であった。

〔注〕

- ¹ 支考：各務支考（かがみしこう）寛文 5 年（1665 年）生まれ。享保 16 年 2 月 7 日（1731 年 3 月 14 日）没。蕉門十哲の一人。美濃（岐阜市）出身。生家は村瀬氏。各務氏は姉の婚家。元禄 3 年（1690 年）蕉門に入る。『前後日記』・『芭蕉翁追善之記』『笈日記』『俳諧十講』『葛の松原』等を著す。後年、美濃派の育成に努めた。
- ² 『芭蕉翁追善之記』：各務支考（かがみしこう）作。芭蕉の晩年前後の記録を纏めたもの。極めて詳しく芭蕉の末期の様子が記録されている。特に、芭蕉の遺書三通は支考が芭蕉に代わって代筆したものである。また、辞世の句の推敲も支考に芭蕉は相談している。これらから芭蕉の晩年の心が伺える。
- ³ 之道：槐本之道（えのもとしどう）1659? 年～1708 年 伏見屋久右衛門のこと。大坂の芭蕉の門人。元禄 3 年に入門、この折に之道と改号。大坂道修町の薬種問屋主人。俳号は諷竹、槐東湖。洒堂と対立する。
- ⁴ 洒堂：浜田洒堂（はまだしやどう）生年未詳。70 歳頃に没。元文 2 年（1737 年）没。通称高宮治助。初号 珍夕（^{ちんせき}珍碩、珍磧とも）。江州（滋賀県）膳所に生まれる。元禄 6 年（1693 年）大坂で開業。之道と対立する。元禄 3 年（1689 年）に『ひさご』を選ぶ。
- ⁵ 惟然：生年未詳。正徳元年（1711 年）没。名は源之丞。美濃国（岐阜県）関に生まれる。元禄元年（1688 年）蕉門に入る。芭蕉の上方にあるときは終始随伴した。芭蕉没後も諸国を行脚した。享年 60 余歳。
- ⁶ 又右衛門：芭蕉の兄の半左衛門の長男と伝えられている。
- ⁷ 二郎兵衛：芭蕉の従僕であろうといわれている。芭蕉の内縁の妻と言われている説がある寿貞の子供である。しかし、芭蕉の子供ではないという説が有力。
- ⁸ 「笈日記」：俳書。各務支考編。1695 年（元禄 8 年刊）主に東海、近畿の蕉門の発句、連句、

文章、消息などを収め、芭蕉終焉に関わる文章に詳しい。

⁹暗峠：(くらがりとうげ) 奈良県生駒市西畑町と大阪府東大阪市東豊浦町との境にある峠。

国道 308 号線と大阪府道・奈良県道 702 号線大阪枚岡奈良線が通る。つづら折りの少ない急勾配が続く。特に大阪側の勾配はきつく、最急勾配は 37%にもなる。落語のネタで「馬の鞍がひっくり返る」から「鞍返り峠」ともいう話がある。

¹⁰『笈の小文』：1690 年頃成立。1709 年刊。1687 年（貞享 4 年）10 月、「旅人と我名よばれん初しぐれ」と詠んで江戸を発つ。三河・伊賀・吉野・明石と遊んだ時の紀行文。

¹¹浮瀬：(うかむせ) 江戸時代の大坂料亭で、最初に名前があがるのが「浮瀬」である。「摂津名所図会巻之二」に掲載されている。芭蕉、蕪村をはじめ多くの文人・墨客が訪れた。上町台地の西崖にあり、2 階座敷からは大阪湾が望めた。

^{12-1・12-2}魚住孝至『芭蕉 最期の一句 生命の流に還る』 275 頁

¹³小宮豊隆 校訂『芭蕉臨終記 花屋日記』の「附録の三『芭蕉翁行状記』」101 頁 岩波書店(岩波文庫) 1948 年版。『芭蕉翁行状記』は元禄 8 年(1695 年)刊行。芭蕉の略歴、終焉の様子、追悼の句などを著したもの。八十村路通(やそむらろつう)著

¹⁴内藤丈艸のこと。名は本常(もとつね) 蕉門十哲の一人 寛文 2 年(1602 年)～元禄 17 年 2 月 24 日(1704 年 3 月 29 日) 愛知県犬山市出身

¹⁵奥野久美子『芥川作品の方法 ―紫檀の机から―』和泉書院 112 頁 2009 年 7 月

¹⁶⁻¹⁸奥野久美子『芥川作品の方法 ―紫檀の机から―』 117 頁

¹⁹芭蕉は辞世の句「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の推敲したことを、「妄執」と考えた。

²⁰之道と洒堂の対立：大阪の蕉門である之道が俳諧師と活躍していた。そこへ近江(膳所)の蕉門である洒堂が大阪へ新たに俳諧師として乗り込んだ。そのことから起こった確執。芭蕉は両者の対立の收拾と仲介の為に大阪に来ることになった。

²¹其角：宝井其角(たからいきかく)、寛文元年(1661 年)7 月 17 日江戸に生まれる。宝栄 4 年(1707 年)没。15、6 歳頃までは医者になるつもりであった。順哲と名乗っていた。17 歳、芭蕉門下で才能を閃かす。江戸座を開く。平明で洒落風な句を詠む。赤穂浪士の一人、大高源吾との関わりは有名。編著書に『芭蕉翁終焉記』『^{みなしくり}虚栗』『続虚栗』『枯尾花』『花摘集』がある。別号には螺舎・宝晋斎・晋子・^{らしや}涉川などがある。

²²子規の芭蕉観：子規は明治 26 年の「芭蕉雑談」(新聞「日本」に連載)で旧派宗匠らによる無批判な松尾芭蕉への偶像崇拜の打破を主張した。そして、蕪村への評価を高めた。しかし、子規の写生俳句論は、「絵画的認識から出発し、芭蕉の『造化に帰れ』という教えと蕪村の印象明瞭な余韻余情句を学ぶことによって深められ、確かめられた。その晩年の句境『平淡味』は、芭蕉の「軽み」と蕪村の「自在」とをはなれて、はじめて到達し得た子規特有の境地である。」(松山子規記念博物館『正岡子規の世界』1994 年 3 月 31 日より)

²³正岡子規『子規全集第 4 巻』269 頁、270 頁『芭蕉雑談』より。講談社 昭和 51 年 11 月

²⁴乙州(おつくに)：河合乙州 生没年不詳 近江の蕉門 俳人河合智月(智尼)の弟 生ま

れは山城の国と言われている。随筆『それぞれ草』

- ²⁵ 路通: 齋部路通(いんべろつう) 慶安 2 年(1649 年)～元文 3 年(1738 年) 八十村氏をも用いる。常陸国(茨城県)高岡の生まれか。貞享 2 年(1685 年)3 月膳所で芭蕉と会い入門。性格的に問題があった人物で芭蕉の勘気受けた。大阪で没。芭蕉は『奥の細道』では路通を当初は同行者として予定していた。
- ²⁶ 小宮豊隆 校訂『芭蕉臨終記 花屋日記』の「附録の三『芭蕉翁行状記』」99 頁 岩波書店(岩波文庫)1948 年版。
- ²⁷ 「三十石船」 米三十石の積載能力(4.5 t)長さ約 17m、幅約 2.5mの木造和船。二十八人乗り。過書船とは関銭免除の関所手形を持つ特権川船を意味する。江戸時代、京阪間(大坂・伏見)の行き来に用いた。伏見から大坂への下りは半日か半夜、上りは竿をさしたり、綱を引いて船を曳き上げるため一日か一晩を要した。運賃は現在の貨幣価値に換算すると、下り 3000 円程度、上り 6000 円程度。(1800 年頃、下り 72 文、上り 144 文。当時、蕎麦一杯が 16 文) 「二十石船」は淀船とも呼ばれた。主に荷物の搬送に使用された。
- ²⁸ 『こがらし』: 之道編。芭蕉追善集。元禄 8 年刊
- ²⁹ 高瀬舟: 河川や浅い海を航行するため、底は平らになっている木造船。
- ³⁰ <http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstre...> 小嶋良一「近世期における日本の船の地域的特徴」
- ³¹ 山口誓子: 明治 34 年(1901 年)11 月 3 日京都市上京区に生まれる。本名、新比古^{ちかひこ}。三高から東大へ。東大俳句会結成に参加。新興俳句の旗手と目された時期があった。秋桜子とともに俳句スタイルの革新を企てた。「ホトトギス」の四 S の一人。代表作に「学問のさびしさに堪へ炭をつぐ」がある。
- ³² 直原玉青: 1904 年 8 月 1 日～2005 年 9 月 30 日。岡山県生まれ。淡路島洲本で育つ。永く守口市に住む。守口・洲本両名誉市民。日本南画界の重鎮(日本南画院理事長でもあった。)南画は中国の南宗画に由来し、日本では江戸時代に発達した。文人画とも言う。大阪南御堂(難波別院)に玉青が描いた「芭蕉の夢」が所蔵されている。枯野の中に漂白する芭蕉も描かれている。俳人でもある。
- ³³ 新井白石の『畿内治河記』に「三番村より平田村に至るまで堤防は、みみずが曲がりくねっているように曲がり、水もまがりまがって下る。その曲がった堤の所を取り去り、河道を直すこと五百余丈」(『ふるさと守口を訪ねて』より)とある。江戸時代の淀川、特に守口辺りは曲がりくねっていた。芭蕉の亡骸を乗せた「二十石船」はその淀川を遡行して行った。
- ³⁴ 芭蕉堂: 東京美術学校一期生の黒岩淡哉(高村光雲の弟子でもある)が造った芭蕉像の石膏の原像の着色したものを、直原玉青が頂いた。玉青は自宅に小さな芭蕉堂を建てた。
- ³⁵ 季刊「禅画報」1989 年 8 月号 54 頁
- ³⁶ 『誓詞句碑アルバム』昭和 48 年 8 月 1 日 天狼俳句会内 誓子句碑アルバム刊行会
- ³⁷ 魚住孝至『芭蕉 最期の一句 生命の流に還る』 筑摩書房 271 頁～272 頁

³⁸ 元禄 7 年（1694 年）10 月 12 日：旧暦での表記である。現在の 11 月の末頃。

³⁹ 「芭蕉翁終焉記」：宝井其角著『枯尾花上巻』に所収。（宝井其角『俳人基角全集』より）
元禄 7 年刊行 芭蕉一周忌の時の書物。其角は芭蕉の死の前日、たまたま大坂に到着していたので芭蕉の死に目には会えた。それ故、芭蕉の臨終間際から葬送、葬儀までのことは其角自身の体験であるが、それ以外は各務支考から聞いて書いたもの。

⁴⁰ 大阪女子大学国文学研究室編『上方の文化 元禄の文学と芸能』 和泉書院 108 頁～109 頁
昭和 62 年 6 月 15 日発行

⁴¹ 過書船等の船番所は八軒家浜から伏見の間、川崎、平田、枚方、橋本、淀の五ヶ所である。
船番所は船の監視、船切手の交付、積荷と船切手の紹介、上米の取り立てなどをしていた。
積荷の検閲もしていた。従って遺体など運ぶことは困難であった。

⁴² 手形とは関所手形のこと。

⁴³ 『天狼』：俳誌。誓子は昭和 22 年（1947 年）12 月、西東三鬼、橋本多佳子等に乞われ発刊した。俳誌『天狼』を通して、何を根源とし、いかに表すかを課題として根源俳句を唱えた。

⁴⁴ 義仲寺と木曾塚：滋賀県大津市にある天台宗の単立寺院。本尊聖観音。〈よしなかでら〉とも。
室町時代末六角氏が木曾義仲を供養するための創建という。芭蕉は遺言によって、死後義仲の墓と並んで葬られ、〈木曾殿と背中合わせの寒さかな〉の句碑が立つ。（広辞苑）

⁴⁵ 樋口覚の『淀川下り日本百景』朝日新聞社刊 217 頁

⁴⁶ 「大八車」：『淀川兩岸一覽 上り船之部 下』の「藤杜岐道」左頁に、二人で引いている米俵を積載した大八車が描かれている（図 3）。ちょうど本町筋から右折し大津街道（大岩街道）に入る場所である。大津街道の京都側の起点でもある。大阪では「大坂^{せんしや}軽車」で俗に「ベカ車」と言い、少し形が違う。『摂津名所図会 巻四 心斎橋呉服店松屋』に載っているのは「大坂^{せんしや}軽車」（図 4）。『摂津名所図会 巻四 津村御堂』に載っているのは「大八車」のようである（ベカ車のようにも見える）。



〈図 4〉「攝津名所図会：心斎橋呉服店松屋：部分」

^{せんしや}
大坂^{せんしや}軽車が描かれている。

（大阪府立中之島図書館蔵：掲載許可済み）



〈図 5〉「攝津名所図会：津村御堂：部分」

^{せんしや}
大八車が描かれている。（大坂^{せんしや}軽車にも思える）

（大阪府立中之島図書館蔵：掲載許可済み）

⁴⁷ 文暁の『花屋日記』:「芭蕉翁反古文(ばしょうおうほごぶみ)」(僧文暁編、花屋庵奇淵校 1810 年刊)を天保の複製本で改題したもの。芭蕉の旅行・病中・終焉・葬送に関する門人の手記・物語および書簡を収めるが、実は偽作。(広辞苑)

⁴⁸ <http://shigeru.kommy.com/otukaidou.htm> 『大津街道』掲載部。「拾遺都名所図絵」四巻、「都名所図絵」巻五、「京都府地誌」紀伊群村誌を参考に、大亀谷(狼だに)の由来、場所を特定している。『大津街道』は伏見街道から分かれて大亀谷村を通って深草谷口町に至る道であること等を調べている。

『花屋日記』(小宮豊隆 校訂 岩波文庫、昭和 23 年 11 月 20 日) 33 頁には、「夫より狼だにに通りがかり」とある。また、伊賀上野の土芳、卓袋は芭蕉の重篤な病状を手紙で知り、急拠、暗峠を越えて花屋へ向かった。しかし、時すでに遅く、直ちに八軒家から夜舟に乗り義仲寺に向かった。その折のことが『花屋日記』には「伏見京橋に著しは夜明け也。直に飛下り狼谷にかゝり」(同上 35 頁)とある。

⁴⁹ 去来の『去来抄』の「丈艸誄」より

⁵⁰ この時の弟子の句

うづくまる薬の下の寒さ哉	丈草
病中のあまりすするや冬ごもり	去来
ひっぱっ 引張てふとんぞ寒き笑ひ声	惟然
しかられて次の間へ出る寒さ哉	支考
おもひよ 思 寄る夜伽もしたし冬ごもり	正秀
くじ なめし 鬨とりて菜飯炊かする夜夜伽哉	木節
みな子なり蓑虫寒く鳴盡す	乙州

⁵¹ 柴田宵曲『俳諧随筆 蕉門の人々』岩波書店 2007 年 11 月 25 日 7 刷

⁵² 小西甚一『俳句の世界発生から現代まで』研究者出版 1981 年 3 月 25 日 140 頁

⁵³ 尾形 仂 編『俳句の解釈と鑑賞辞典』笠間書院 173 頁「うづくまる薬の下の寒さかな」という丈草の句の鑑賞評より。2002 年 6 月 25 日 初版第 2 刷

⁵⁴ 「軽み」:芭蕉が重視した俳諧の理念。はからいや渋滞のない、平淡でさりとした境地。

⁵⁵ 樋口覚『淀川下り日本百景』206 頁に「風流を唱える芭蕉の旅が『風雅』どころか大名旅行であることを見抜いたのは上田秋成である」とある。

《付記》 論文の中に掲載している写真は、全て筆者が現地に赴き撮影したものである。



義仲寺山門



義仲寺の芭蕉の墓

【参考文献】

- 秋里籬島著・竹原春朝斎画『撰津名所図会』 寛政10年（1798年）9月 9巻12冊完成
 秋里籬島著・丹羽桃溪画『河内名所図会』 享和元年（1801年）冬十一月刻
 各務支考『支考全集』 校訂者：老鼠堂永機・其角堂機一 博文館 1898年
 宝井其角『俳人基角全集』 彰考館 1935年9月20日
 小宮豊隆 校訂『芭蕉臨終記 花屋日記』 岩波書店（岩波文庫）1948年11月20日第8刷
 天狼俳句会内誓詞句碑アルバム刊行会『誓詞句碑アルバム』昭和48年（1973年）8月1日
 『古板大坂地図集成』 青文堂出版 1973年10月15日 再刻発行
 岡山大学国文学資料叢書八（別冊）『芭蕉翁追善之日記』 岡山大学池田家文庫等刊行会
 福武書店 1974年10月20日
 正岡子規『子規全集 第4巻』 講談社 昭和51年（1976年）11月18日
 暁晴翁 著、松川半山 画『淀川兩岸一覽 宇治川兩岸一覽』 四巻四冊 文久元年 1861年
 小西甚一『俳句の世界發生から現代まで』 研究者出版 1981年3月25日
 大阪女子大学国文学研究室編『上方の文化 元禄の文学と芸能』 和泉書院
 昭和62年（1987年）6月15日発行
 季刊「禅画報」1989㊟第8号 1989年
 雲英末雄・高橋治『新潮古典アルバム松尾芭蕉』 新潮社 1990年11月10日
 駒井正三『ふるさと守口を訪ねて』 守口市市長広報担当 1991年11月1日
 松山子規記念博物館『正岡子規の世界』1994年3月31日
 宗政五十緒・西野由紀『なにわ大阪 今と昔 絵解き案内』 小学館 2000年1月1日
 金子晋『芭蕉晩年の苦悩―門第酒堂と大坂入りの芭蕉―』 田工房 平成13年（2001年）8月1日
 大阪成蹊女子短期大学国文学研究室編『淀川の文化と文学』 和泉書院 2001年12月20日
 『守貞謄稿図版集成』 雄山閣 2002年1月10日
 尾形 仂 編『俳句の解釈と鑑賞辞典』 笠間書院 2002年6月25日 初版第2刷
 枚方市教育委員会発行『市立 枚方宿鍵屋資料館』 平成15年（2003年）12月1日第2刷
 樋口覚『淀川下り日本百景』 朝日新聞社 2004年3月19日
 京都地名研究会編『京都の地名検証 風土・歴史・文化をよむ』 勉誠出版 2005年4月
 半藤一利『基角俳句と江戸の春』 平凡社 2007年2月22日 2刷
 柴田宵曲『俳諧随筆 蕉門の人々』 岩波書店 2007年11月25日 7刷
 奥野久美子『芥川作品 ―紫檀の机から―』 和泉書院 2009年7月
 魚住孝至『芭蕉 最期の一句 生命の流に還る』 筑摩書房 2011年9月15日 初版1刷
 西野由紀・鈴木康久編『大阪 淀川探訪―絵図でよみとく文化と景観』 人文書院
 2012年5月10日 初版第1刷
 真宗大谷派・難波別院（南御堂）『南御堂と芭蕉』 2012年7月31日 第14刷

(Received: February 2014)